

※こちらは体験版、無料版となります

キャラクター

:KOS-MOS

異世界から転移してきた女性型戦闘用アンドロイド
元の世界に帰るために各地を転々としていたが
今は、ある街の孤児院を拠点に活動している。

:レオス

孤児院で生活している少年

KOS-MOSに対して淡い恋心を抱く

潮騒が遠くに聞こえる。

その穏やかな波音さえ、今の少年には刃物のように胸を
抉っていた。

あれは、まだ夏が始まる少し前のことだった。

孤児院の門をくぐったとき、彼女はそこに居た。

長い蒼い髪。無機質で、それでいてどこか儚げな深紅の瞳。

子どもたちはすぐに「お姉ちゃん！」と駆け寄った。

レオスだけは、隅からじっと見つめるだけで、声をかけられなかった。

名前は**KOS-MOS**。

院長先生が「遠くの街から来た人」と言ったことだけは覚えている。

初めてちゃんと話したのは、裏庭のテントだった。

夕陽がオレンジに染まる中、彼女は洗濯物を丁寧に畳んでいた。

レオスがそっと近づくと、彼女は振り向きしゃがんで視線を合わせてくれる。

「こんにちは。レオス」

その声は静かで、機械的だと他の子は言った。

でもレオスには、世界で一番優しい声に思えた。

彼女はいつも同じ時間に裏庭にいた。

昼間は街や郊外に出て、帰りに果物やお菓子を子どもたちに分けてくれることもあった。

レオスには、いつも一番大きなリンゴをくれた。

ある日、彼女が洗濯物を干しているとき、白い首筋に赤い痣を見つけた。

「.....どうしたんですか、それ」

レオスが小声で聞くと、

KOS-MOSは一瞬だけ瞳が大きくなったが、すぐにいつもの無表情に戻った。

「痛い？」

「少々、トラブルがありました。大丈夫です」

その言葉が、レオスの胸を抉った。

痛いのに、大丈夫だなんて。

その夜、レオスは屋上で星を見ながら決めた。
——大きくなったら、絶対に**KOS-MOS**さんを守ると。

朝の食堂で彼女がみんなの朝食を作っている。
大きな鍋をかき回す姿は、機械的であるはずなのに、どこか
優しく見えた。

「おはようございます、レオス」
隅に立っている自分に気づいて、彼女は静かに振り向く。
他の子たちは「お姉ちゃん」と呼ぶ。
レオスだけは、どうしても「**KOS-MOS**さん」と呼んでいた。
「今日はスープにハーブを多めに入れてみました。味見して
いただけますか？」

差し出されたスプーン。
震える手で受け取り、口に運ぶ。

「.....おいしい」
「お口に合って、幸いです」

夕方、市場から帰ってきたとき彼女は何処か疲れた顔をしていた。

レオスが駆け寄ると思い切り腰に抱きつく。

「おかえりなさい！ **KOS-MOS**お姉ちゃん」

「ただいま戻りました、レオス」

優しく抱き返してくれた。

「レオスは、いつも元気ですね」

嬉しかった。いつも自分を見ているような気がした。

レオスは恋をした。

まだ「恋」という言葉を知らないまま、

ただ胸が熱くて、苦しくて、

世界が彼女だけになった。

夜、子どもたちが寝静まった後。

レオスは一人で屋上に出た。

星がとても綺麗だった。

扉が静かに開いて、**KOS-MOS**が現れる。

「まだ起きているのですか？」

「.....**KOS-MOS**さんこそ」

二人は並んで座る。

沈黙が心地よかった。



「ねえ、**KOS-MOS**お姉ちゃん」

レオスは真剣な顔で言った。

「僕、絶対に大きくなって、お姉ちゃんを守れる人になるから。

怖い人たちなんか、僕がやっつける。だから.....ずっとここにいてね」

彼女は少しだけ目を伏せて、
長い沈黙の後、静かに呟いた。

「.....ありがとう、レオス」

そのとき、レオスは確かに感じた。

彼女の優しい指が、自分の頭をそっと撫でたことを。

少年は知らなかった。

あの優しい指が、もう二度と感じれなくなることを。そして

――

白い首筋の赤い痣が、

ただの「トラブル」ではなかったことを。

太陽が海を真っ白に焼いていた。

バスを降りた瞬間、熱風と潮の匂いがレオスの頬を打った。

でも、それよりも胸を灼いたのは、



すぐ横に立つ**KOS-MOS**の姿だった。純白の競泳水着に青いライン。

普段とは違う、

はだけのほどに張り付く布地。胸の膨らみが布地を押し上げ、

腰のくびれが際立ち、

濡れていないのにすでに艶めかしく光っている。レオスは息を呑んだ。

これまで見たどの**KOS-MOS**よりも、

美しくて、遠くて、

触れたら壊れてしまいそうで、

それでも触れたくてたまらなくて。

「……レオス？」

彼女が振り向いた。

深紅の瞳が、いつもより少しだけ柔らかく見えた。

日差しの中で、蒼い髪が風に揺れる。

少年は頬が熱くなるのを感じながら小さく手を振った。

「こっこんにちは...**KOS-MOS**お姉ちゃん」

見ていたのをバレたかと思い焦ってしまうレオス。

他の子たちはもう海へ走り出している。

レオスだけが、彼女の横を離れられなかった。

波打ち際で子どもたちと戯れる**KOS-MOS**は、

水をかけられても怒らず、

笑顔ではないけれど、確かに口角が上がっているように見える。

水着が濡れて肌に張り付き、

胸の形が浮き彫りになるたび、

レオスは視線を逸らしながらそれでも盗み見てしまう。

(凄い綺麗.....)

幼いながらも知らぬ間に芽生えつつある本能に胸が痛い。

嬉しくて、苦しくて、

まるで心臓が外に出てしまったみたいだった。

そんなときだった。

下品な笑い声が背後から近づいてきた。

「よお、お嬢さん」

(!?)

振り返るとサングラス、派手なアロハシャツの男達。

街で何度も見た**KOS-MOS**に絡んでいる裏組織の連中だ。

リーダー格が、ニヤニヤしながら**KOS-MOS**を見下ろす。

視線は水着の胸元を這い、腰を舐めるように這い、太腿の奥まで這っていく。

「.....何でしょうか」

KOS-MOSの声はいつも通り静かだった。

子供達に対してとは違う声色なのがレオスにも分かった。

孤児院の印象とは大きく違う。

「いやあ、ちょっとお茶でもどうかなってさ？」

「ご遠慮します。私たちは子どもたちと遊んでおりますので」

冷たく断られると、男たちは肩をすくめた。

だが、去り際に一人が**KOS-MOS**の耳元で囁いた。

「後でシャワールームに來い」

その瞬間、**KOS-MOS**の瞳が、ほんの一瞬だけ細く憂いを帯び、首筋の古い痣を無意識に隠すように手を当てたのをレオスは見た。

男たちが遠ざかっていく。

レオスは駆け寄って、彼女の手を握った。

「**KOS-MOS**お姉ちゃん……大丈夫？」

「問題ありません。遊びを再開しましょう」

いつも通りの無表情だがどこか無理をしているように見えた。

遊びが一段落し、

遊び疲れた子どもたちがテントで休憩しようと足を運ぶ。

そんな中、**KOS-MOS**は一人、シャワー室の方へ歩いていった。

遠ざかる彼女が気にはなったが

心地よい疲労感からはレオスはテントで横になる。

しばらくして他の子供達の笑い声で目が覚める。

テントを出て辺りを見渡すが**KOS-MOS**が居ないことに気づく。

(あれ？何処だろう？)

眠る前の彼女の姿が頭を過ると少年の小さな体を突き動かした。

シャワー室の建物は少し離れた場所にあった。

壁に耳を当てると、水音と、男たちの下品な笑い声が漏れてきた。

「……相変わらずいい具合だぜ」

「ほんと、たまんねえなよな」

(**KOS-MOS**さんは……？)

もう帰ったのかもしれない。

そう自分に言い聞かせて、踵を返そうとした瞬間。

「……っ、ああっ！」

「えっ？」

掠れた、でも確かに彼女の声。鼓動が急に早くなる。

震える手で、僅かに開いた通用口の扉を押し開けた。

湿気と熱気が鼻を突き、湯気で視界がぼやける中、

レオスは物陰の掃除用具箱に身を潜めた。

そして上蓋を数センチだけ開け、息を殺して覗いた。

視界が、真っ白になる。

ガラス一枚隔てたシャワールーム。

その向こうに彼女が、**KOS-MOS**がいた。

競泳水着はずり下げられ、片足を高く持ち上げられている。

黒髪の男が背後から腰を鷲掴み、激しく打ちつけていた。

ぐちゅ、ぐちゅ、と粘ついた水音が響くたび、

彼女の豊満な乳房が上下に揺れ、蒼い髪が汗で頬に張り付く。

深紅の瞳は固く閉じられ、唇から掠れた吐息だけが漏れていた。

「クックッ……相変わらず最高の締めりだな、お前」

男の腰が打ちつけられるたび、

KOS-MOSの喉が短く鋭い喘ぐ

「——っ！」

(どうして？お姉ちゃんが悪い奴らと？)

レオスは息ができなくなった。

頭の中が真っ白で、鼓動だけが爆音を立てる。

(何.....これ.....)

股間が異様に熱い。

震える手が勝手に水着の紐に伸び小いながらも硬いペニスを初めて触る

初めて触る熱に、背筋が震えた。

(僕のおちんちん...どうなってるの)

熱く脈打つそれがぴくんと跳ねた。。

初めて、こんなに熱くて、こんなに苦しいのに、

気持ちいい。皮を上下に動かすたび、

背筋に電流が走るような快感が走る。

「うっ、出すぞ」

「ああっ！」

男が低く唸り、全身を震わせ

深く突かれた**KOS-MOS**の口から甘い声が出る。

(うわあ、なに、これ、なんかでちゃう)

彼女が快楽に身を焦がす姿にレオスは

身体を強張らせ始めての射精を体感した。

幼いペニスから出た白濁液が工具箱を汚す。

(おしっこ出ちゃった、でもいつもと違う)

「よっと、結構出ちまったな」

ちゅぽんっ音を立て男が**KOS-MOS**から男根を抜くと

結合部から白濁が溢れ、太腿を伝って床に滴り落ちる。

それを見て、自分が今まさに扱っていた小さなペニスから出たのと、

まったく同じ白い液体が**KOS-MOS**さんの中に注がれているのを知る。

(僕の……と同じものが……**KOS-MOS**さんの中に……)

ゴクリっと唾を飲み込む。

「次、俺だ」

別の黒肌の巨漢が男と入れ替わる。

KOS-MOSの身体を両手をガラスに這わせ、
豊満な乳房がべったりと押し潰されている。

「お～、エロイなそれ」

「へへっ、さあ入るぞ」

お尻を高く突き出させ、後ろから一気に貫いた。

「——んっあああっ……！」

今までとは比べ物にならない深さ。

乳房がガラスにべったりと押し潰され、白い肉が左右に広がる。

「入れただけでイッてるじゃねえか。素直で可愛いな」

黒肌の腕が後ろから腰を鷲掴みにして逃がさない、

膣口が丸見えになるほど脚を開かされる。

ぬちゃ、ぬちゃ、と粘膜が擦れる音が響き出し

ガラスに白い息の跡が広がっては消え、また広がる。

その光景に目が開き鼻息が荒くなる。

気付かぬうちに前のめりになる姿勢。

その光景を、少しでも近くで、
少しでも鮮明に焼き付けたい。熱に浮かされたように体重を
更にかけたとき、
足元でずり下げた水着が足首に絡まった。

「わっ……！」

体重を掛けた用具箱がバランスを崩して倒れる。
小さな悲鳴と共に、少年の体が勢いよく湿った床に転がり出
てしまう。

水着に掃除用具、少年の身体がシャワールームに静寂をも
たらし、

男達とガラス越しに**KOS-MOS**の深紅の瞳が、
信じられないものを見るように見開かれる。

「……レオス？」